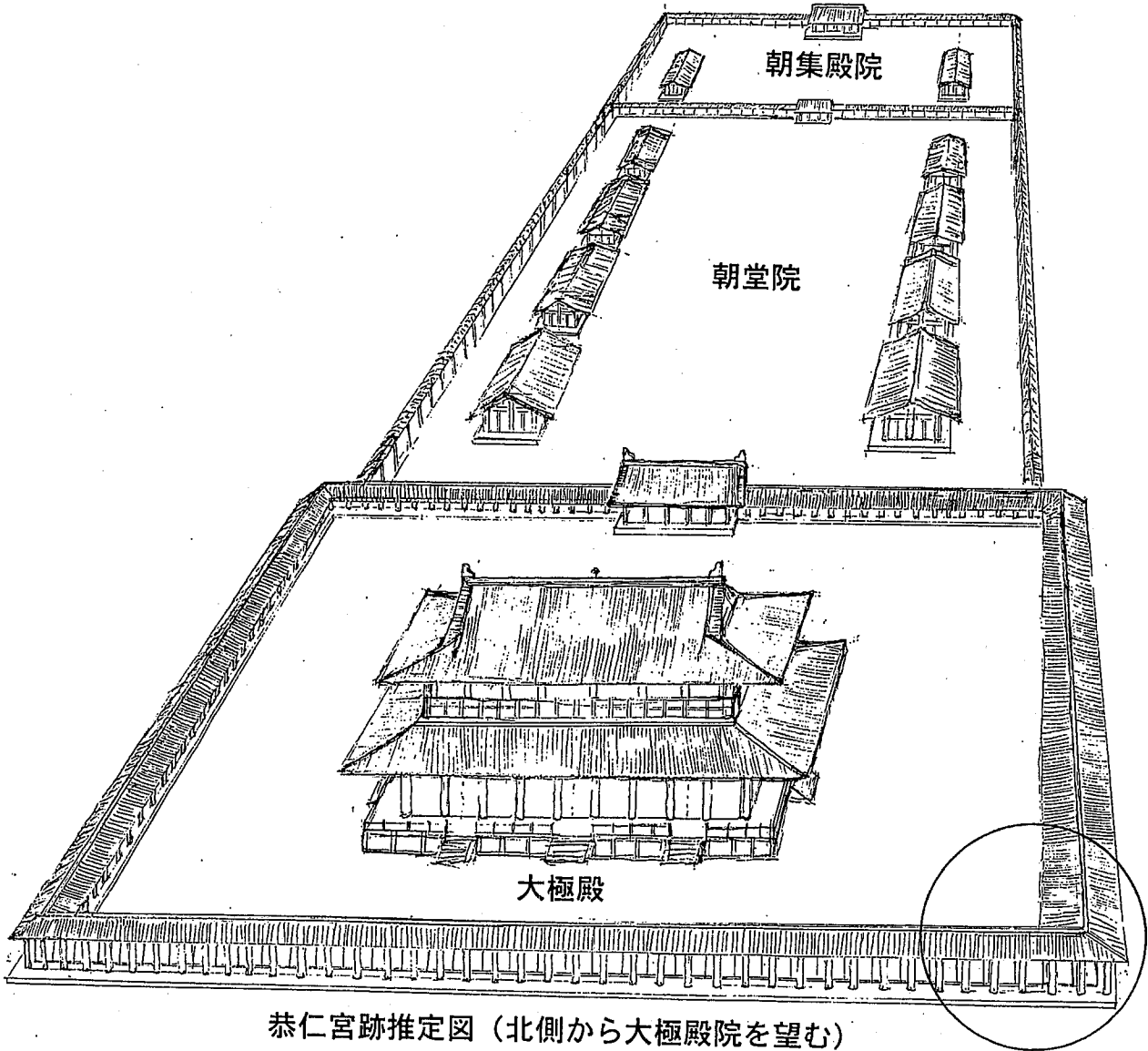


平成19年度
くにきゅうあと
恭仁宮跡発掘調査
現地説明会資料



恭仁宮跡推定図（北側から大極殿院を望む）

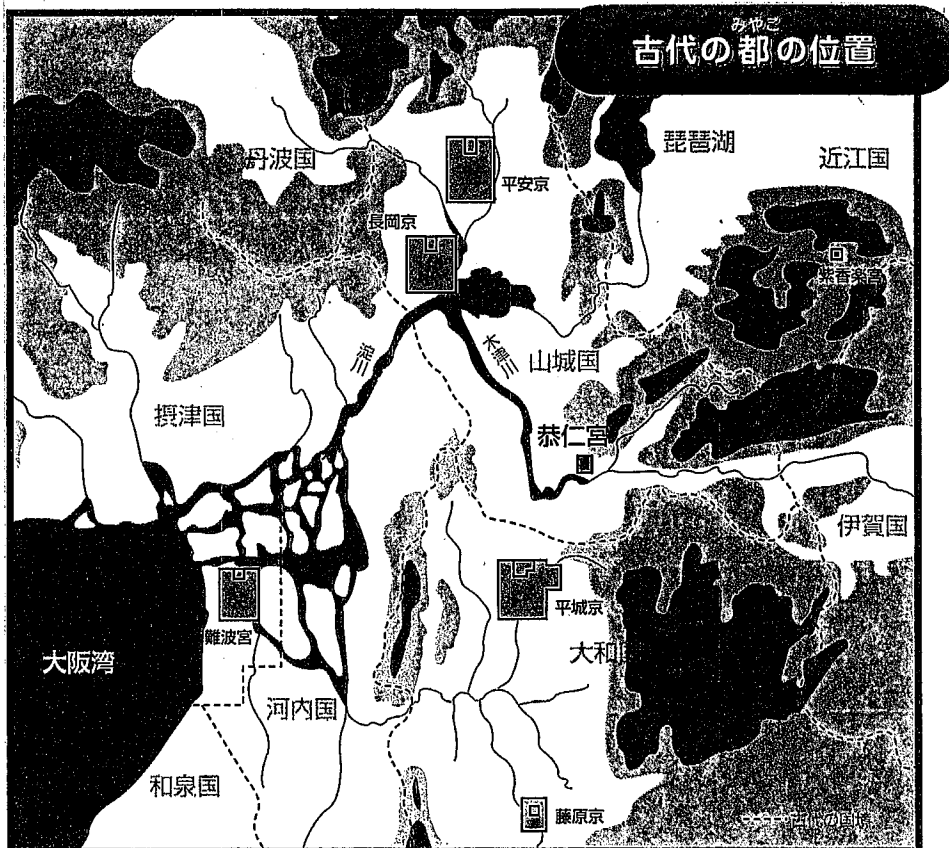
調査地点

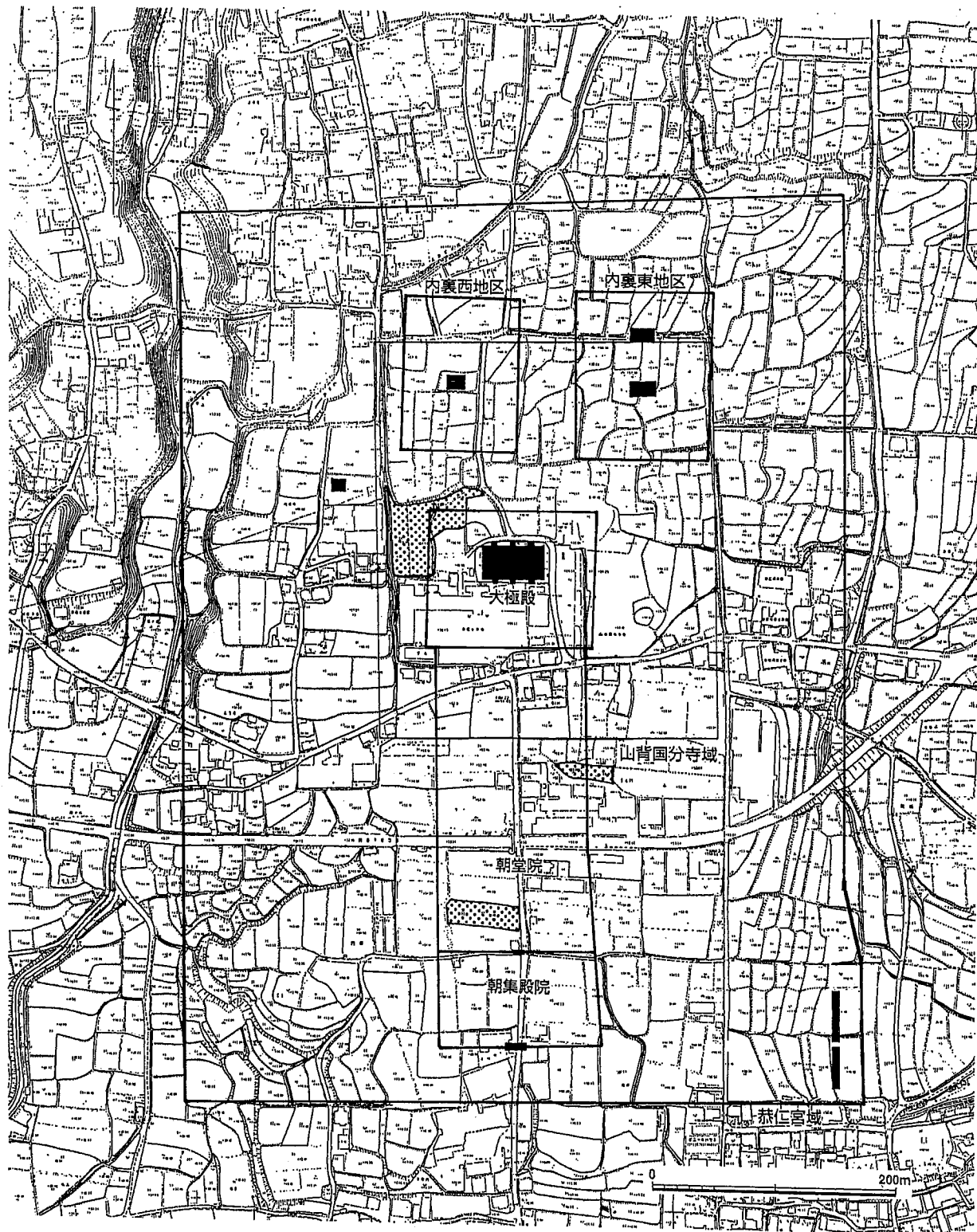
京都府教育委員会
平成19年11月24日

はじめに

京都府には、古代に3つの都が造られました。平安京は延暦13(794)年に京都市の中心部に造られました。明治元(1868)年に首都が東京に遷るまでその役割を果たし、「千年の都」と呼ばれています。平安京に都が遷る直前の延暦3(784)年には、向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて長岡京が造られました。そして、今からおよそ1270年前の天平12(740)年に、聖武天皇により造られた恭仁京は、この3つの中では最も古い奈良時代の都です。恭仁京は木津川市に所在する加茂町・山城町・木津町の3町にわたって広がっていたと考えられています。そして、その中心となるのが、ここ加茂町 瓶原に造られた「恭仁宮」です。

宮の中には、天皇が暮らし、様々な儀式などが執り行われた内裏や、政務や国家の儀式が行われた大極殿や朝堂院、さらには役人達が仕事を行った役所(官衙)など、国の中でも最も重要な施設が造られました。恭仁宮を中心とする一帯は、短い期間ながら国の首都となっていたのです。しかし、そのわずか4年後の天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移り、さらにその後再び奈良の平城京へと戻されることとなりました。恭仁宮は短い役目を終えた後、天平18(746)年に山城(山背)国分寺へと造り替えられました。





第1図 恭仁宮全体図 (S=1/5,000・アミカケが調査地点)

※■はこれまでに見つかった主要な建物跡

これまでの調査で分かっていること

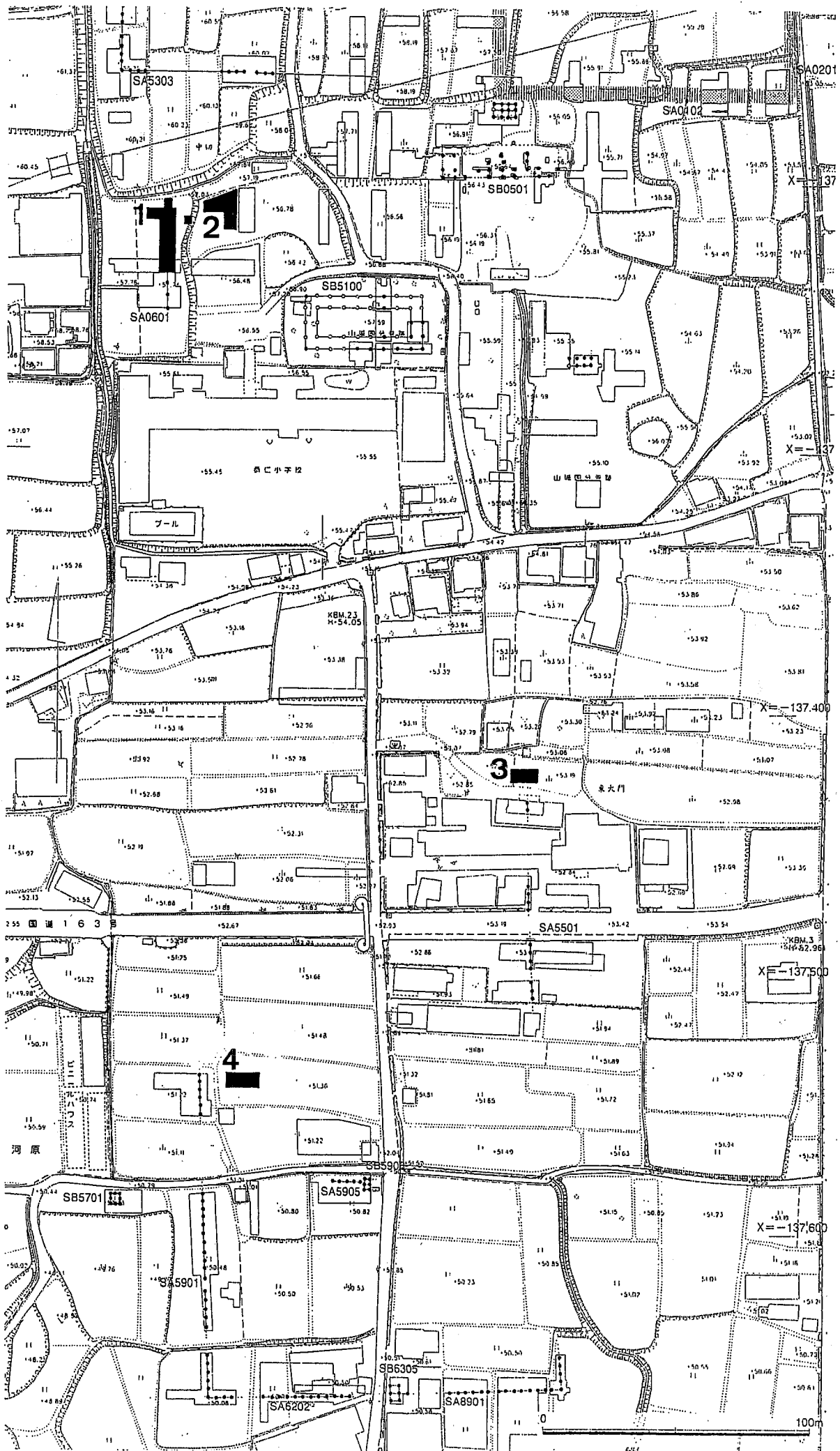
恭仁宮跡での発掘調査は、昭和48年度から京都府教育委員会が、そして昭和61年度からは旧加茂町教育委員会(平成19年度からは木津川市教育委員会)も一緒になって行っています。

これまでに大極殿や内裏の建物跡などがいくつか見つかり、宮の中がどのようなになっていたのか少しずつ分かってきました(第1図)。宮域は東西に約560m、南北に約750mの大きさを広がり、背の高い土塀(築地塀)で囲まれていたことも分かりました。大極殿は、宮の中心から少し北側に造られており、高さ1mを残す大きな土壇の上に築かれた東西が約45m、南北が約20mもある大きな建物でした。柱を大きな石材(礎石)の上に建てる礎石建物で、北西と南西の隅に使われた礎石は、当時のままの位置にあることが調査により分かりました。また、大極殿の北東では東西約43m、南北約12mもある大きな掘立柱建物も見つかっています。大極殿の北側には、東西に2つ並ぶ塀で囲まれた区画があることが分かり、これが内裏と考えられます。このような在り方は、他の都では見られない恭仁宮だけのものです。この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は、周りが全て板塀(掘立柱塀)で囲まれ、東西が約98m、南北が約128mの大きさでした。「内裏東地区」は東・西・南の三方が土塀(築地塀)、北側が板塀(掘立柱塀)で囲まれ、東西が約109m、南北が約139mとなり、「内裏西地区」よりも一回りほど大きく造られていることが分かりました。朝堂院では、これまでに内側に建てられていた建物跡(朝堂)は見つかりませんが、周りを板塀(掘立柱塀)で囲んでいたことが分かり、南側に造られていた2つの門(朝堂院南門と朝集殿院南門)も見つかりました。

今年度の調査地点

今年度の調査は、大極殿院地区で大極殿の周りを囲んでいた施設(大極殿院回廊)を見つけること、朝堂院地区で東側を囲んでいた塀跡(掘立柱塀)と、内側に建てられていた建物跡(朝堂)を見つけることを目的に行いました。

発掘調査は9月4日から開始しており、調査面積は3地点4箇所(第2図)で合計約400㎡です。



第2図 調査地点位置図 (S=1/2,000)

今回の調査で分かったこと

○第1・2調査地点(第3図)

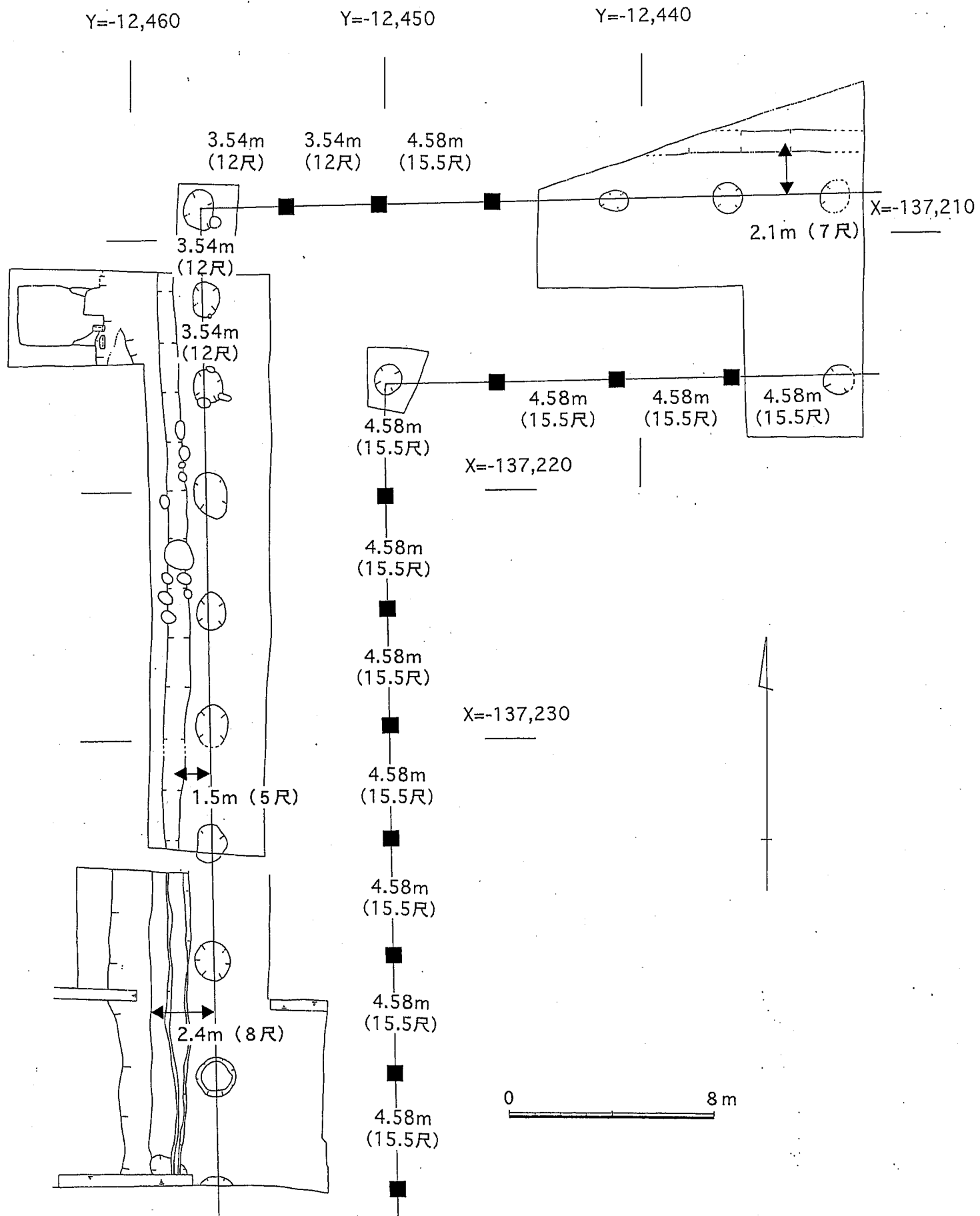
第1調査地点は、昨年度の調査で大きな穴が4つ見つかった地点の北側となります。これらが、大極殿院回廊の柱を支える礎石を置いた跡(礎石据え付け痕跡)と考えられましたので、北側へも続いていくのかを確かめるために調査を行いました。すると、同じように直径1.2~1.5mを測る穴が6つと、その西側に南北方向の溝1本が見つかり、その並び方から、これらの穴が大極殿院回廊の礎石据え付け痕跡であることが分かりました。また、北西部分の高くなった地点では瓦を焼いた窯跡も見つかりました。

礎石据え付け痕跡は、南北に約4.6m(15.5尺・1尺 \approx 0.296m)間隔で一直線に並んでいました。しかし、北端の3つはその間隔が短くなり、約3.6m(12尺)となっていました。西側で見つかった雨落ち溝と、礎石据え付け痕跡とは約1.5m(5尺)離れていました。また、北端の3つはその間隔が短くなることから、大極殿院回廊がここで東へと曲がる可能性が高いと考えられました。

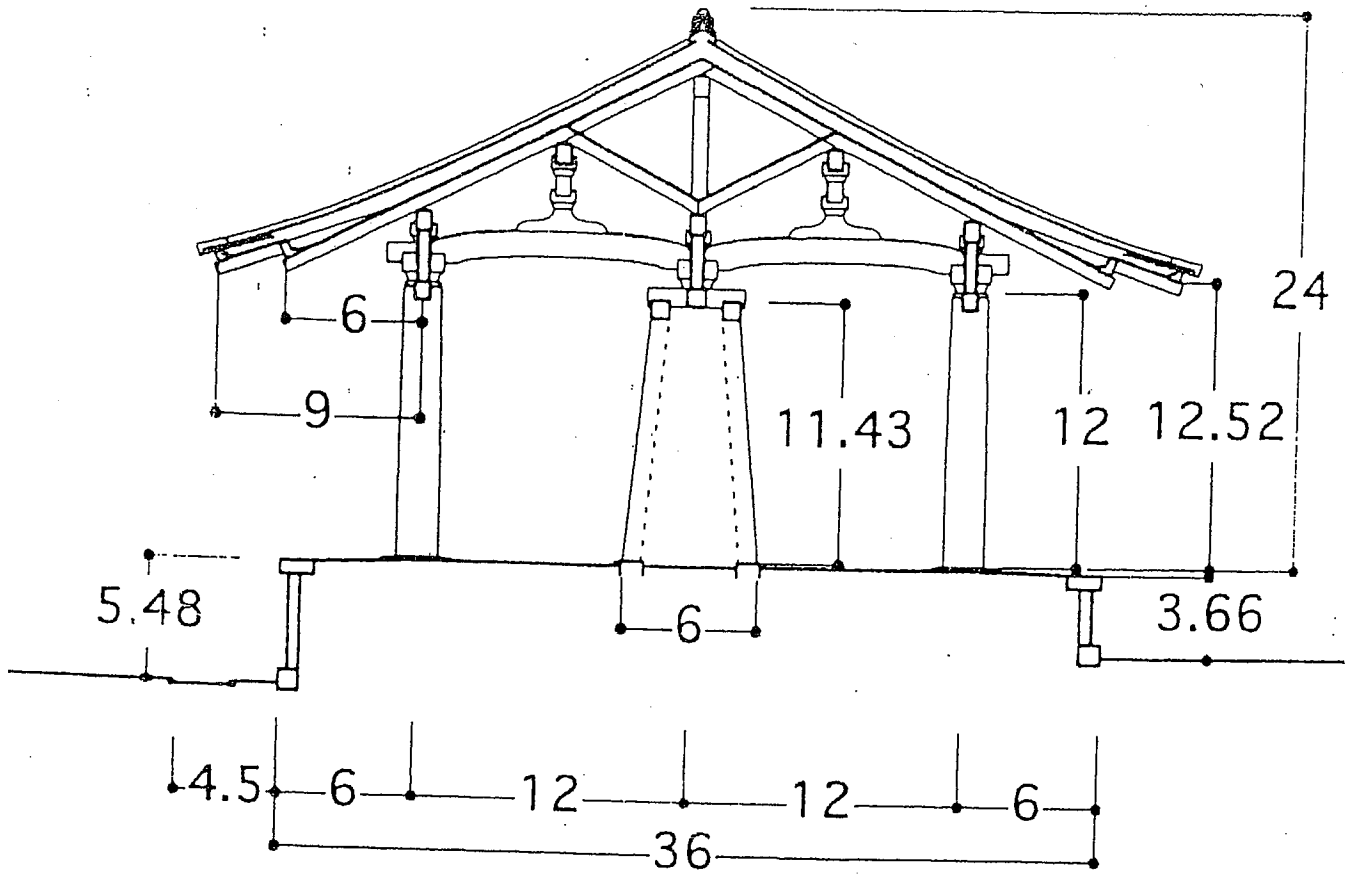
そのため、東側に第2調査地点を設定し調査を行いました。ここでも、第1調査地点と同様に礎石据え付け痕跡が4つと東西方向の溝1本が見つかりました。北側で東西に並ぶ3つも約4.6m(15.5尺)間隔で並び、北側で見つかった雨落ち溝までは約2.1m(7尺)離れていました。また、東端で見つかった南側の1つは北側の礎石据え付け痕跡から約7.2m(24尺)離れていました。

○第3・4調査地点

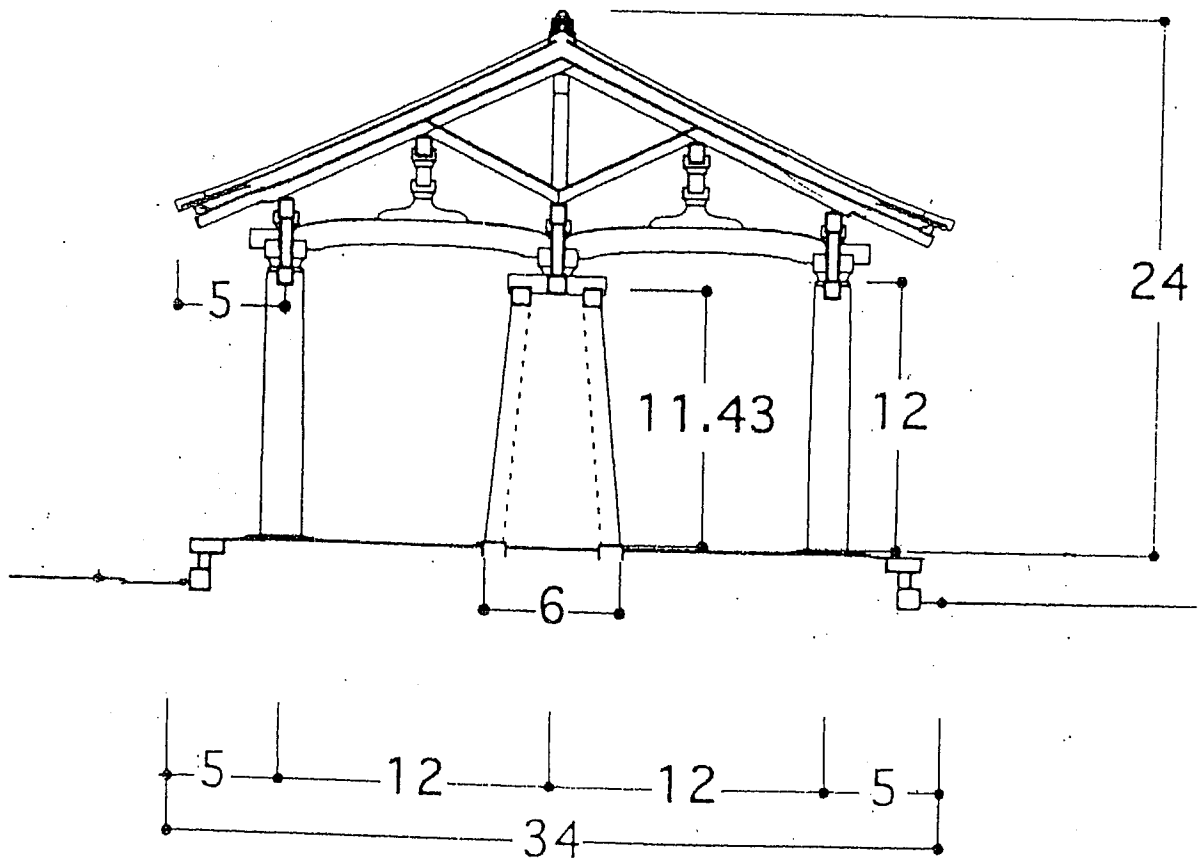
朝堂院の東側を囲んでいた塀跡(掘立柱塀)を見つけることを目的に行った第3調査地点では、塀跡は見つかりませんでした。また、建物跡(朝堂)を見つけることを目的に調査を行った第4調査地点では、南北に約3.3m(11尺)間隔で並ぶ柱跡が2つ見つかりました。これが朝堂の柱跡となるのか、分かりませんので、来年度以降、引き続き調査を行う予定です。



第3図 第1・2調査地点で見つかったもの (S=1/200)

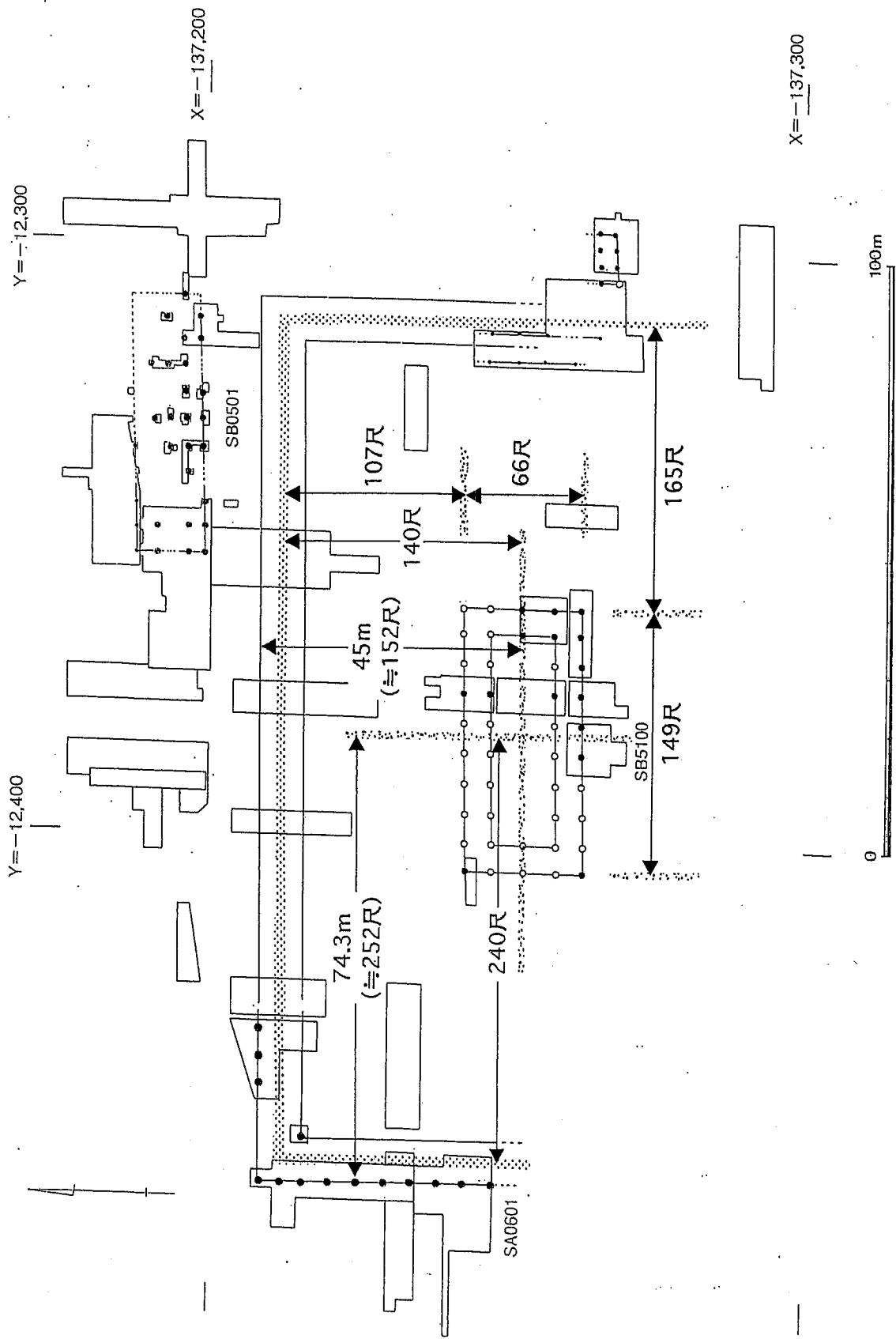


平城宮第1次大極殿院回廊
 (『奈良文化財研究所紀要2004』)



恭仁宮大極殿院回廊西辺
 (上図を基に想定)

第4図 大極殿院回廊の想定断面図 (S=1/100)



第5図 大極殿院地区の復元図 (S=1/1,000)